

社会変容とこれからの教養教育

教養学部教授(教養学部長) 佐々木俊三

一 社会の変容と大学教育の役割の変化

ひと口に教養と言っても、従来通用してきた概念内容で教養についての共通理解が得られると考える教育者は少ない。言うまでもなく、社会の変容に応じて教養のあり方は変わる。その教養のあり方に応じて教育の共通理解が調べられるのだとすれば、今日ほどの激しい社会変容に直面して、教育がどれほどの自己変革を遂げることができたのか、あるいはできていないのかという問題は、極めてわかりづらい事柄だと思う。その理由の一つとして、教育が世代をまたぐ時間的スパンを必要とするのに対し、社会の変容は教育の変化速度を明らかに超えている事実を挙げることができる。

教育は社会変容の速度に追いついていない。江戸・明治以来の教育立国であった過去と比較すれば、教育が社会を変容させ得た過去とは異なり、社会のほう教育のあり方を混乱させかき乱していると語るのが、明らかに現実合っている。一方で、旧来の学術にかかわる伝統的教養を変わることなく教える大学教育はもはやあり得なくなった。他方で、朝令暮改のごとくカリキュラムの変更を行う教育もまた、あるべき教育の姿から言えば浅薄のそしりを免れ得まい。教育の現状は、制度的整備の表層をはがせば混迷の度をあらわに見せる。次代の社会を構築すべき人材を育て時代を導く羅針盤の使命を今日の大学教育が果たしているようにはとうてい思えない。大学の大衆化の現状をとらえれば、とうに羅針盤の使命は終わっている、そう考えることもできる。社会を導いているものは産業や経済であり、その中核たる企業にしたところで、大学の教育にそれほどの期待を抱いているようにも思えない。そんな現実を照らしてみれば、大学とは、自立した教養人を育てる独立した機関ではなく、学生を社会に参入させるための準備教育、基礎教育にその使命を変えたと見ることもできる。その見方を教育を受ける大学生の立場から眺めてみれば、大学とは、厳しい社会的現実と直面する前の気楽に過ごせる最後の楽園に見えてこよう。楽園の味をなめた者が、わざわざ厳しい社会に参入するよりも気楽に過ごせることをよしとし、社会に出ることをいよいよ時代の表層で浮遊することを選んだとしても、彼らの社会選択を責めることはできない。働きながら自らの社会的ステータスを高めようとして学びに入る夜学生や苦学生という表現が意味をもたなくなりつつあるのも、このことと連関している。また、大学の選択を自らの力でなし得ず、オープンキャンパスに父母がついてきて父母に

大学選択を委ねる学生が増えてきたのも、これと無関係ではない。三十年や四十年前には考える必要もなかった大学と企業との産学連携についても、今日では大学が積極的に企業の後を追いかけてようとしていることも、この社会的現実の一現象である。

二 大学教育が持続的にかかわるべき対象としての「地域」

社会変容に敏感に応答する教育の試みは、もちろん種々に行われてきた。東北学院大学教養学部が学部の基幹科目として「現代社会の諸問題Ⅰ・Ⅱ」を一年次と三年次に配置したのは、社会的現実に対する学生の意識の相対的低さと意志の薄弱化という現状認識に由来していた。東北地域に主要な卒業生を送り込み、地域の総合大学として発展してきた東北学院大学が、その教養教育部門を独立させ、人間科学・言語文化・情報科学という三つの学問群を配した教養学部を設立したのは、平成元年のことである。

その教育理念として掲げた学問の学際性と総合性は、現代社会の諸問題のどれ一つをとっても、従来の学問区分ではとらえることのできない総合性と学際性をもっているとの、今日では当たり前となった認識を基礎にしていた。現代社会の変容を敏感に把握してそれに批判的に対処する柔軟な思考を培おうとした意図は、地域にとってそれなりに評価されはしたが、高校教育全般にわたる相対的衰頹とともに教育の戦略目標も大きく変わり、学生の現代社会を生き抜く意志の薄弱化に対応してその見直しを迫られている。大学教育の基礎ともいべき作文力や資料収集力、討論や課題発見能力などの基礎能力のみならず、高校教育での不足を補う補習教育や、最終的に生きていく意志を培うキャリアデザイン教育を含めた学生の自己確立支援の教育についても、その緊急な導入の必要性が叫ばれている。

研究推進ではなく教養教育に根幹を置く大学教育は、こうした状況に対応して種々な制度的対処を行い、困難な局面を打開しようとしているように見える。しかし、華々しく見えるその対処の影で、明確な方向性を示し得ない根本的な混迷もかいま見える。元来、教養という概念は、地域の相対的に安定した生活を前提にしなければ、それ自体として成り立ち得ない。地域との関係を離れてより普遍的な仕方で人類一般に必要な教養という概念も、考えてみることはできようが、それにしても抽象的すぎる。

なるほど、地球人や国際人という言い方も通用していよう。しかし、生きることが生活することであり、生活することが土地や地域に持続的なかかわりを持ち、深い人間関係を構成しなければならない以上、普遍的な教養を云々するだけでは事は足りないのである。かといって、振り子を逆に振り、地域それ自体がすこぶる流動的で、相対的に安定した生

活基盤に立っているとの認識をもつこともできないからである。鳴り物入りで売りに出された新興住宅の団地群が、一世代を経てみれば歯が欠けたように衰え廃墟化していくのは、まさに特殊地域の流動を象徴する一局面であろう。「持続可能な地域社会」という概念は、この両者のはざまに登場してきた。誤解されやすいが、地域は地方ではない。もともと地域という概念は、中央にも地方にも偏しない変わらざる普遍的な概念であったし、またこれからもそうである。人々の生活の礎となる地域社会の岩盤が、たとえ経済のグローバル化によってかなりな深みにまで掘り崩されたとしても、人が人となりそこでよい生を培おうと努め、倫理的なあり方を模索して一人の大人に変貌する場所は、何をおいてもこの地域社会という場以外にはあり得ない。東北学院大学のような地方の一私学が持続的に人材を送り込んで涵養してきたのは、まさにこの地域社会であった。教養学部は、大学の長い期間にわたる人材輩出の恩恵を武器にして、脆弱化した大学生に自己変革を促し、その学びの場として地域社会を選び、そこへ深く入り込むことで生きる意志を研ぎ直そうとする教育目標を新たに立てた。平成十七年度の学部改組の試みがそれであり、これによって「地域構想学科」という新しい学科を設立したのは、ある意味で必然の試みであったと言える。

三 学生の存在状況とコミュニケーションの質的变化

これまで先端的研究や世界的視野に立つ研究をうたって地域を飛び越えてきた大学でさえ、今日では地域に密着した大学を標榜しようとしている。それも理由のないことではない。「地域」という標語は、改組・革新を意図する大学にとってキーワードに墮した感もある。だが、東北学院大学教養学部が、従来の人間科学・言語文化・情報科学という学問群に加えて、地域構想という学問群を付設したのは、単なる付加にとどまらない、学問理念の根幹にかかわる認識があったからだ。そう言って過言ではないと思う。

私たちは、現代社会の諸問題が学問の枠組みを越える学際性・総合性をもつばかりではない、より根本的で焦眉の必要性を訴える観点として、実践性を要請しているとの認識を共有していた。第一に、現実の社会と大学との間の懸隔が狭まり、大学は社会に対して相対的な自立を享受することができず、社会の過激な動きに巻き込まれて、たとえ不透明であるにせよ、近い未来や遠い未来の構想のプログラム化をいやが応でも示さざるを得なくなってきた事情がある。第二に、社会のグローバル化が生み出したと言えなくもないすでに言及した若者事情がある。何ごとに対しても無関心・無表情で、問題関心の類型化・定型化に流れ、コミュニケーションの層の深みを示し得ない学生の現実である。

そうはいつでも、悪化や幼稚化といった評価で彼らをあしざまに言おうとしているわけではない。以前にもまして、学生は素朴であり素直であるように見える。これまで与えられ覚えねばならなかった知識とは質の異なる、大学で学ぶ新しい考える知恵は、まるで乾いた砂に水がしみ込むごとくに吸収され、心の違う層に受容されて、学ぶことのみずみずしい喜びが彼らを満たすように思える。しかし、そうした素直さに加えて、彼らはまた同時にニヒルでもあり、どこかに奇妙な諦念を抱えているとも言わざるを得ない。諦念といっても暗い重いものではなく、「楽しければいいのさ」というまことに軽い捨て鉢さである。所詮そんなにしゃかりきになってもどうなるものでもない、そんな不遜な諦念が若者の素直さと同居して、とらえどころの困難な奇妙にねじれた学生の存在状況という現実、私たちは直面しているのだと言えよう。コミュニケーションの層の深みを示し得なくなった、とはわかりづらい言い方かもしれない。単なる発話に始まり、説明や状況把握、論理的展開、物語化を経て、相手の反応を測定し評価し、それに即応する力は、持続的で豊かな人間関係という背景なしには育ち得ない。だが別のレベルのコミュニケーションも存在する。あいさつや儀礼、仕種や所作にわたる一連のコミュニケーションの層があって、これらは地域社会の習俗や教養に裏打ちされて育まれるものであるが、若者のコミュニケーション行為にこうした層がクリアな形で現れることが少なくなってしまった。その一つの象徴的事例を、近時の成人式の乱脈に見てとることもできる。

しかし、そればかりではない。同時に、生活が抽象化したがために苦痛や喪失の人的経験をすることが少なくなり、その結果として、情愛や友愛、愛情といった人間関係の深みに到達することも必要としなくなってしまった。近時の学生を見ていて、深い驚嘆の念がなかなか見られなくなったことを観察するのは、ただ一人私だけの経験ではあるまい。また同時に、その表情から喜怒哀楽の豊かさが消えてなくなったのを観察するのも、私一人だけの認識ではないだろう。

学生が素朴でありながら、かつ同時に年増のごとく飽き飽きとしたそぶりを示すというねじれた認識も、今日の社会の変容にその大きな要因を見てとることができるように思う。過剰な保護社会が、学生をして新しさに直面させる経験の場を刈り取り、経験の領域を狭めて胎児化させたと言える。

四 地域と大学との交換関係

生活の抽象化が強いた彼らの現実を踏まえれば、彼らにもっと具体的な生活経験を、もっと喜怒哀楽に富んだ人間経験をさせる場所を準備することが必要であろう。そのことは、

教育の現場で彼らに深い実践意志を育むことにつながってくる。教養学部は、東北学院大学の中でいち早くカリキュラムに「ボランティア活動」を加え、教育制度の中に位置づけた。やらせという批判を浴びながらもこれを継続し、さらに学生の自主的な実践性を組織的に引き出すべく地域構想学科開設にまでこぎ着けたのは、社会の変容についてのこのような認識に基礎を置いてのことであった。実践性とはその意味で、大学が学生にとって生の転機となるような変貌の経験の場所を準備することにつながる。

地域構想学科は、学びの方法の特色として、現場主義・フィールド主義を標榜した。それは何よりも、学ぼうとする動機を地域の現場から掘り起こしてくること、地域の現場に入り込み、喜怒哀楽の人間的表情を示して生活している入々の苦楽を経由し、そこから学びの動機を獲得してくることを意図している。よき意志をもって地域に暮らす人々の苦楽に直面するならば、その苦楽をなぞりそれに添おうとし、共に感情を交換し合う共感の経験が生まれる。学びの深い動機は、その共感の深さからしか生まれ得ない。地域から得た共感を大学の冷静な知恵を潜らせ咀嚼すれば、単なる感情にとどまらない疎隔と意識化の作業を経て、学生はひと皮むけた成人の自己認識へ脱皮していくことが可能となろう。

教養学部はその開設以来、少人数教育を標榜して、すべての学科の学生に等しく個人指導が必要な総合研究(卒業研究)を課してきた。二万字を超える論述の文章をすべての学生がこなさなければならないことは、教育を施す側にとってもそれを受ける側にとっても、単位の数(四単位)に見合わないかなりの苦行である。しかし、教育がこの苦行を捨てては、学生の潜在的可能性の中からいったい何を引き出し得たと言えるであろうか。教育の最大の効果は、教育者が進んで学生と共に走る努力を行い、学生の生活に添ってできるかぎりの時間を彼らと共に過ごし、彼ら一人ひとりが教育者によって見捨てられることなく注視されていること、個人個人の特異な可能性を引き出せるように伴走者の役割を果たしてあげることがなければ、不可能である。

学生の側から言えば、教育者との人間的経験を通して、自らの別の可能性をまなざし、特異な大人へと変貌する経験を行うことに、教育の最大の効果がある。それが可能となっこそ、教師と学生との出会いを準備した大学は初めて、Alma Mater (養育する母、すなわち「母校」となり得るだろう。大学という母によって、学生は新しい生へと誕生するからである。

五 自由の経験を準備する大学の新しい役割

社会の変容によって、伝承されてきた旧来の社会の通過儀礼や成年儀礼は衰頹した。家

族は、近隣地域の付き合いによって生まれる家族間コミュニティの中間段階を経ずして、一足跳びに抽象的な現実社会や国際社会に飛躍してしまう。地域のコミュニティが厳格な通過儀礼を与えて成人となるための試練と経験を準備した、そうした制度習慣はもはや存在しない。大人になるための準備が家族と個人の自覚に任されるようでは、真の自立に至るための十分な社会性を涵養することはできないだろう。今日、通過儀礼の代替の機能をかろうじて果たしうる制度組織があるとすれば、それは大学以外にないと思う。若者を一人の大人とするために旧来の地域共同体が果たしてきた試練と経験を与える役割を、今日、大学が果たす必要がある。そうでなければ、社会のインフラによって胎児のように包まれ守られた彼らに、羊膜を自ら突破させる強い意志の力を育むことはできない。

企業がその機能を果たすこともあり得ようが、営利を旨とする以上、すべての企業にそれを要求することはできない。言うまでもないことだが、大学も経営を抱えている。その面をことさら強調すれば、大学も企業と同じ体質をもつと言って過言ではない。しかし、大学は企業ではない。まして、多くの企業がひしめく産業社会に学生をただ送り込むだけの準備機構にとどまるものでもない。先日、四年前に卒業した学生たちに会う機会があった。仕事の前途多難な重さに鬱になりかけた卒業生、入社する前に胸苦しくなることがときにあると訴えた卒業生、彼らは皆、苦しさを吐露しつつも大人の顔になり変わっていた。誰にも助けを求めることができない苦しい経験をくぐり抜けてこそ、人は一人の大人となる。楽しく楽なだけの大学は、大人にさせるこの苦しい経験を卒業後に先送りするだけであろう。

大学が成年儀礼の主要な役割を果たすべきだとすれば、成年と社会との関係について、十分な批判的認識を提供できなくてはならない。大人となることは、この一元化し全体化した社会にうまく適合して生きていくことだけではない。うまく生きることとよく生きることは、全く違う。よく生きることがどんなことなのか、この一元化した社会の中で自分だけにしか可能でない独自の生き方は何なのか、群れの羊のように誰もが同じ社会的機能を果たさずに、わが道を歩む覚悟をもった大人をどのように準備するのか、大学はまさにこうした複数の多元的な社会性の可能性を模索する必要があるだろう。そのためにこそ、大学は自由な討論の場とならねばならない。そうした場となつてこそ、学生は其中で己に見合う意味と意志と覚悟を研ぎ澄まし、持続可能な地域社会の中で自分が果たすべき役割を自覚して、何よりも大事な「いかに生きるべきか」の問いに自らの生をさらすこととなるだろう。

大学は、その意味で、学生の変貌の場所、変貌するための自由の経験を育む場所、そし

て同時にそうした自由を保証する討論の場所、総じて生きる多様な方向性を発信しうる「社会的アジール」の場所とならなければならない、私はそう思うのである。*

* 同じ事柄を別の文脈で書いた文章がある。以下の文章を参考していただければと思う。「意志を育てる」(二〇〇七年度東北学院大学大学要覧「教養学部」)、及び「「経験」の始源的意味について」(『季刊 教養学部』第五号、東北学院大学教養学部発行、二〇〇七年)。

なお、この原稿は、『大学時報』No.316 Sept.2007 (pp.48-53.特集「リベラル・アーツ教育のこれから」)に寄稿したものであることを、付記しておく。